

テーマ：天下理論からアジア共同体に至る道筋

第11回ワンアジア財団国際講座は国立台湾大学歴史学科教授の甘懐真先生にご講義を賜った。甘先生は台湾大学から歴史学博士を授与され、嘗て台湾大学東アジア文明研究センターで執行長をお務めになり、台湾大学文学部副学部長、台湾科学技術省歴史部門共同委員長などを歴任なさった。甘先生のご専攻は中国古代史、東アジア政治史、皇帝制度と儒教である。この講座の重点は以下の通りである。

甘先生は先ず今回の講演の主要課題として、いわゆる伝統的な天下の概念を検討し、この天下の概念がアジアの未来に如何に作用するかについて説明した。先生は著名な小説の冒頭のセリフである「これが最善で且つ最悪の時代」という言葉を引用し、時代の進歩が同時に社会や世界の動乱を引き起こすと説明した。近代以後、西洋の民主制度は新しい民族国家を創造したが、社会の対立も激化させた。甘先生は、社会の分裂を造成する者に対抗し、矛盾を惹起する主要原因は強迫的「承認（欲求）」だと認めた。先生は現代人が流行のヘアスタイルなどを通して、いわゆる交換符号を得ようとするのは他人あるいは社会からの承認を得るためだと指摘し、特に自己の存在意義を確認することだと述べた。個人の承認欲求が拡大すると極端に言えば民族の承認欲求、国家の承認欲求となる。個人は近代国家成立以後、新しい身分一国民（Nation）を与えられ、民族の承認欲求、国家の承認欲求はすなわち今日の世界を混乱させる不安の原因である。

甘先生は更に世界が直面する苦境を解決するには西洋の制度を考えてみることで可能になると提示した。改めてアジアの前近代的制度を回顧し、思索することで必要となるのは、新しい秩序の原理を構築することであり、「天下」という概念がキーワードである。「天下」の概念は中国古代の西周の前期を起源とし、漢の時代には皇帝制度の核心的思想となった。日本では5世紀頃に天下とは自己の政権と統治の領域と称され、8世紀の律令制時代にはさらに全面的に唐の制度の天下観を受容した。伝統的に天下は天が支配者を指し示すということであって、一種の「領域」的な概念である。天下は各個の自立的自主的な政治単位が共同で形成するもので、前近代の東アジア地域の自称であり、このような天下観念は血縁・言語・宗教・文化的統一を不要とし、認証欲求の一体感を追求する必要もなかった。

然るに中国と日本の伝統的天下制度は、19世紀中期の西洋列強の侵略で終わりを告げた。事実上、西洋帝国主義がグローバルな政治制度を構築し、常に承認欲求問題を露わにした結果、民族と民族、国と国との間に重大な対立が生じ、大規模戦争が巻き起こった。これを鑑みると、近年、学者が反中国史の脈絡で中国史上の諸現象を検討し、前近代の東アジアが既に天下制度中の新しい政治原理を尋ね求めることを期待し、これはアジアの未来における繁栄と安全を保障するもの

である。これが天下研究が成しえた近年の人文社会科学会の研究で重要な背景である。

甘先生は最後に西洋の制度が新しい民族国家 (Nation-state) を創造したことを肯定したが、これが現在の世界の紛争を解決させるには各国が特に民族主義を拡大し強調すべきではなく、天下観念が新たな思考の中にあり、いかに前期題的な脈絡の中に戻しうるか、天下では一般市民が主体となる制度を構築できるかを考える必要がある。アジア地域では東アジアの市民が天下の民という一体感を創出することがよく、ならびに共同性の中で各人各様の相違するところを受け止め、言い換えれば東アジア市民は天下観念の中で「承認欲求」の感覚を少なくして、それぞれの文化の「異質性認識」を包容することが重要であり、そうすれば伝統的天下観念の中で新しいアジア共同体を構築することが可能になり、それがアジアの安定と平和と繁栄の未来を作り上げることになるだろうと締め括った。

(ウェブサイト: <https://oneasia.pccu.edu.tw/faculty.php>)

(原稿作成: 林孟蓉・日文系副教授)

(翻訳: 齋藤正志・日文系副教授)